

哲學研究

第二十三號

第三卷

ヤージュナヴルキヤの見たる希臘輪廻思想

本田 義 英

—

ヤージュナヴルキヤ (Yajurveda) は最古印度の思想家として比較的最も人間的存在の事實を想像し得る第一人者であることは言ふまでもない、けれども彼れが果して實際人間としての存在を有して居たか否か、或は假説へ彼れを人間視し得るとしても、其時代の如何に至りては今日之を確説することが出来ない。又希臘に於ても其輪廻思想發生の時代が何時代であつたか、又其創設者も果して何人であつたのか、種々議論の存する所である。従つてヤージュナヴルキヤの輪廻思想と希臘のそれ

との時間的前後の問題、延ては相互影響交渉の議論も亦今日之を確説することは全く出来ないと言てよいのである、而して一が他を他が一を批評したといふ様なことなどが固より事實存しなかつたことは茲に言ふまでもない、故に従つて論題の如くヤージユナヴルキヤの見たる希臘輪廻思想などに關する史實の有り得べからざることは自明の理である、しかも余が茲にかくの如き論題を掲げて研究せんと欲するの意は蓋し時間の問題は暫く之を第二義とし、先づ兩者成立思想の結果に依り、印度輪廻思想創設者と認めらるゝヤージユナヴルキヤの立場から希臘のそれを窺ひ、少しく思想内容の上から時代判別の考察を加へんとするにあるのである。

けれども之は本稿主要目的である後段の一節に依りて命名した論題であつて、本稿全體として見れば實は「最古輪廻思想に關し埃及希臘兩國の關係を説き、印度のそれに及び、ヤージユナヴルキヤの立場より希臘輪廻思想を見る」といふのが適切であると斷つて置く。

二

埃及人はその太古の代に於て既に輪廻轉生の思想を有して居た、彼等は人間の靈

魂を以て不滅とし、肉體の滅すると同時に靈魂は他の動物の肉體に宿る、地上、水中、空中に存在する一切有情の形體を取り、再び人間に還歸する、その間年月を要すること三千年であるとして居た、歴史の父祖と呼べるゝかのヘロドトスは之を以て輪廻轉生説の第一始原となした (Herodotus, II. 123)。然るに紀元第二世紀頃に生存したと思はるゝディオゲネトスラエルティウス (Diogenes Laertius) はその著 (The Lives and opinions of eminent philosophers, tr. by Yonge) に於て、狭くはあるが併し埃及及び印度その他諸國の見聞をも顧みながらしかもそのピタゴラスの條下に於て、彼れはピタゴラスを以て時と體とを異にして靈魂は必ず流轉すべきものなることを確説した最初のものとなして居るのである (pp. 343—4)。然るに又、アリストール學派の末期の徒であるディオドロス (Diodorus) の言ふ所に依れば、彼れはオルヒウス (Orpheus) を以て善因善果惡因惡果輪廻轉生の説をなした最古のものとなして居る (cf. Enfield, The History of Philosophy, I, p. 121)。

茲に自ら大小四つの問題が提出されねばならぬ、即ち小なる問題としては (一) ピタゴラスがオルヒウスに負ふ所があるか、或は之に反し (二) オルヒウスがピタゴラスから得たのであるか、最後に大なる問題としては (三) その兩者延てはそれ等の學派總じ

106
ては希臘輪廻思想がその思想源泉を埃及に仰いだのであるか(四)或は否か。

三

ローデ (Erwin Rhode) はピタゴラスがオルヒウス學派に負ふ所ありとなす代表者の一人である、勿論オルヒウス學派とピタゴラス學派との間の類似は實に著しきもので、嘗にその教義のみならず、儀式の瑣細なる規程に至るまで偶然と考へ難き程度に於て兩者相似て居る、ローリンソン (H. G. Rawlinson) も之を承認して居るのである。

けれども抑もオルヒウスなる人その人の存在については一方紀元前第六世紀頃に生存したトラキアの詩人であり、一神祕學派の創設者であつて、輪廻の説を主張したといふ傳説もあるが、しかし他方彼れが果して實在した人間であつたか否かに關しては何等信すべき論據がないとさへ傳へられて居る (Euseb, Birlwin 等の説參照)。又一步を譲りてたとへ彼れを實在した人間であるとしても、學派としてその名を掲げ、その學派に關する唯一最古の權威者と信ぜらるべきはオノマクリトス (Onomacritus) であるが、彼れがその全盛を極めたのは紀元前第六世紀の中葉である、然るにピタゴラスが生れたのは紀元前五百七八十年頃で、生國サモスを去つてクロトーンに行つ

たのが同五百三十二年であると傳へられて居る。そしてピタゴラスその人が輪廻轉生説を唱へたことに就ては(假説へそれが最初の説でないとしても)古來何等の異論を發見しないのである。茲に吾人はキャンベル(L. Campbell)が言た様にオルヒウス學派とピタゴラスとの相互關係に對する議論即ち小なる前二問題に關する議論は、上述年代上の關係から暫く疑義に附して置かねばならぬことになる。併しこの問題は若し總括的に兩者を殆ど同時代の輪廻思想といふ點より見れば、本稿に於てはその細論を避けて共に之を希臘輪廻思想とし之を見て別に大なる不都合は無いことと思ふ。残るは第三第四の大なる問題、即ちオルヒウス(その學派をも含めて)とピタゴラス(同様)總じては希臘の輪廻思想なるものが埃及にその思想源泉を得たのであるか、或は否かといふ問題である。

四

禁欲主義が輪廻轉生の思想に伴ふ當然の産物であることは言ふまでもないが、古來希臘に於ける禁欲主義は印度に於けるその如く極端にまでは走らなかつたのである。彼れ等の以て禁欲となすものを見ると、肉慾の節制と肉食の禁制とがその主

要なるものであつた、思ふに輪廻轉生の思想はその初めバルドギンが言た様に一面に於て一切生物は悉く同族であるといふ信仰から起つたのであらうが、肉食の禁制などは確かに之に起因して居るのである、オルヒウス學派に於ては、肉食といふことは所謂共喰ひであるとして之を戒しめたものであつた、ピタゴラス學派に於ても亦之を主張して居る、彼れ等が植物の豆類をも食ふことを禁じたといふことは有名な話であるが、之は動物の卵から推求した結果であることは疑ふまでもない、この肉食禁制は埃及に於けるそれと一致するのである。又オルヒウス學派のものは死者を葬るに毛皮を用ふることを禁じたといふことであるが、これは動物を損すべからずといふ根本規定が死者にまでも適用せられたのであつて、これ亦埃及に於ける制規と一致するのである。又現世に於ける善惡業に對し死後それに應ずる苦樂を感受するといふオルヒウス學派の教説は、埃及に於けるオシリス神の裁判と似て居る。

以上の如き事例から之を見ると、希臘と埃及との間には何等か交渉する所があつた様に想像せられる、けれども亦他方より觀察すれば之は偶然の暗合、一步を進めて言へば形式上の類似であると思はれぬでもない、と論ずる學者もある、キャンブベルの如きその一人である、論者に依れば以上の如き兩者の類似は兩者の思想内容まで

も含めたものと見ることが出来ないのであつて、かく想像するのは要するに皮相の見解に過ぎない。一體オルヒウス及びピタゴラス學派に於ては、靈魂の不滅を論ずるに明かに轉生の意を含めて居る、そして究竟吾人の肉體を離脱せんとする解脱思想までも伴つて居る、然るに埃及に於ける信仰は之と本質的にその趣を異にして居る、即ち埃及に於てはかのピラミッドが之を證明する様に、肉體が保存せらるゝ間死者の靈魂(ψυχή)が間歇的に生を享樂するといふ信仰から、死者に對する禮拜が行はるゝに過ぎないのである、即ち死者を崇拜の對象とし時々その靈魂を慰めんが爲に肉體を保存するに過ぎず、たとへ神の裁判ありとしてもそれは其境の苦樂を示す道具に止まり、轉生の思想は要するに全く之を見る事が出来ないものであつて、これ兩者がその趣を異にする根本的問題であるとなすのである、埃及を以て輪廻轉生説の最初の發生地となすヘロドトスの意見は明白なる誤解であるとなすへ論駁して居る。シ
 ャーデル(Schröder, Pythagoras und die Indier)はヘロドトスの記する所をも顧みず、古代埃及人は輪廻轉生の説を知つて居らなかつたのであつて、ピタゴラスが埃及からこの思想を採るべき筈がないとなすへ論じて居る。又オッパート(O. Oppert)の言ふ所に依れば、最古埃及人の間に存した靈魂不滅論が果して Metempsychosis であつたのか、

或は Metempsychosis であつたのか何等徴すべき記録がない、思ふに或は何時の代か他よりかのヘロドトスの言ふ様な確實な輪廻轉生説が埃及に輸入されたのであるかも知れないとのことである、この考は一部分キャンベルなどの意見と同一趣であるが、併しヘロドトスに同情ある説である、けれどもこの説は更に埃及が果して何れよりその思想を採用したかといふ新しい問題を生む、しかも難解の問題である。

由是觀之、希臘輪廻思想と埃及との關係問題は愈々紛糾錯雜を來たし、今や埃及に於ける輪廻轉生説を否定するのみならず、埃及のそれを以て他よりの影響に依るとまで想像せらるゝに至つては、希臘の思想源泉を埃及に求めんとする問題(第三)は茲に行き詰まらざるを得ない。しかも希臘が埃及輪廻思想の源泉地であるとは信じられない、茲に問題は他に何等か開展する所がなくてはならぬ(第四)。

五

上來述べしが如く若し然りとすれば輪廻思想初發の地が埃及であるか又は之に反し希臘であるか、全く五里霧中である、こゝにこの思想が各國各民族獨立の思想であるといふ折衷説が出るのも止むを得ない所である。

一體輪廻思想なるものは人間思想の裡に倫理的宗教的傾向を帯び來り、吾人現世の状態はこれ過去業の結果であつて、現世の所業に應じ未來に於て善惡苦樂の果を結び、何時の世にかに再び其生を受くるといふ自然の要求から起つたものであることは疑はれない。若しこの點から考察すれば東西地を異にするも同一様式思想が同時に獨立に起り得るが如く、輪廻思想も亦人間自然の要求として相互何等關係交渉する所なく發生し得ることも否定すべからざる所である、従つてこの思想を以て埃及の獨占物とする事は出來ないのであつて、苟も倫理的宗教的思想の存するところそこには必ず存在すべき共通の思想で、例へばアーサー王の碑銘に關する傳説中、王の碑文の一節に「王は何時か復た王となるべし」(Rex quondam Rexque futurus) といふ傳説が信ずべきものであるならば、古代ケルト民族中既に輪廻思想を有して居たといふことも想像され、しかも之が希臘の影響を受けたものであるとは信じられないが如きはその一例である、若しかくの如く折衷的論證に依り人間共通の思想として推求し來れば、之に依りて一面更に別の方面より希臘輪廻思想が埃及の影響を受けたといふ議論の反證となることになる。併し茲に更に之に對する反證的傳説及び學說の論ずべきものがある。

六

ハリソン (J.E.Harrison) は人間思想發展上自然の過程として見れば希臘の輪廻思想は別に埃及から影響を受くるの必要も無かつたらうが、併し受けたと見る方が *Probable* であるといひ、ロリソンはヘロドトスの言ふ所を信頼した結果であるが、輪廻思想は固よりのこと、希臘初期の哲學を以て埃及から得たものであるとさへして居る。希臘には元來特殊な宗教團體もなく、又宗教の根本的體型に關する統一的傳説も存せず (Ladd, *The Philosophy of Religion*, I, p. 177) プラトイが言へる如く埃及人が希臘人を目して知識に於ては幼稚なりと罵倒し、ソロンさへ埃及に於てその知識を得たりといふ傳説が若し事實なりとすれば、オルヒウス、タレリス、ピタゴラス、プラトイその他希臘の哲學者が知識を求めんがために埃及に旅行したといふ傳説も亦信ぜられないでもない (Enfield, オツバートはこの傳説を以て確實ではないが、*Possible* であり *probable* であると述べて居る、ロリソンも同一意見である。若しこれ等の説にして眞なりとすれば希臘の輪廻思想は埃及から來たのであると想像されないでもないこととなる。

要するに疑問と想像とを以て終始して居て何れとも斷定することは不可能であるが、余の想像する所に依れば、希臘哲學者殊にピタゴラス等の埃及訪問は恐らく事實であらう、そしてピタゴラスが訪問當時に於ては埃及の靈魂不滅論は *Metempsychosis* の時代を過ぎ既に *Metempsychosis* となつて居て、ヘロドトスが記するが如き信仰が存した事であらう、たとへその初め *Metempsychosis* であつても死後神の裁判を想像する以上、恰も印度吠陀時代の冥府思想が優波尼沙土時代に至つて明かなる輪廻轉生の思想を形成する一面の要素であつた如く、次第に *Metempsychosis* に進展するは自然の徑路である。そして一方希臘に於てもキャンベルの言へる如く、ピタゴラスやオノマクリトス以前に於て既に埃及とは獨立に、かゝる思想の核子は若干存在したことであらう、それが更に上述の傳説等に傳ふる次第順序を経て、更に埃及の思想に影響され、茲に希臘輪廻思想が多少その形體を具備するに至つたのであらうと想像するのが最も穩健な見方ではないかと思ふ。そしてその希臘輪廻思想形體具備の一要素として尙他に一思想的源泉が存在したのではないかと想像されるものがある、印度の思想即ちこれである。

七

印度古代の思想と希臘のそれとの間に類似以上の關係があることは敢てコレブルーク (Colebrooke) やガルベ (Garbe) 等の説明を俟つまでもない、併し之に對して相互交渉の事實を考ふべき積極的資料は殆んど全く無いのである、故に時には之に對してたとへ思想上兩者相似ると雖ども何等交渉する所はなかつたのであるといふ議論を主張する學者も無いではない、ローリンソンの如きその一人である、彼れの言ふ所に依れば、希臘は印度と直接の交渉を行らなかつた、希臘が印度に關して知つた所は皆ヘルシヤ人を介してである、古代印度に於ける哲學、宗教、其他一般文明に關しては希臘は之を知る所なく、又注意もしなかつた、希臘人は單に彼等同時代人の文明に對し願みる所なかつたのみならず、彼等は他國人を *barbarian* と見做し皆等しく輕侮を以て之を遇した、故に如何に兩者の思想が酷似せるにせよ希臘が印度に負ふ所ありとは考へられない所であるとして居る、又輪廻思想に就ても彼れは兩者何等相交渉する所がないとなすのである、尙彼れの意見に依れば兩者が直接影響し合ふに至つたのは亞歷山遠征以後の事であつて、それ以前に於ては何等之を知るべき證據も

なく、又當時に於ては兩者直接の交通は *physically* に不可能であつたとなすのである。然るに之に反しガルベは此問題に關し思想上からの比較考察をも加へ、希臘の思想はペルシヤ人の仲介に依りて印度思想に負ふ所ある事は之を容認しなければならぬとし、當時小亞細亞のイオニア地方の住民と其以東の住民との交通が頻繁を極めた時に當つて、希臘人と當時ペルシヤに在つた印度人とが思想の交換をもなしたといふ事は想像し得らるゝと論じて居る、これユーベルエフ (*Übervogel, Grundriss d. Gesch. d. Philosophie, I. s. 36*) と意を同じうする所である、そしてガルベはタレース、エムベドクレース、アナクサゴラス、デモクリトス、その他多くの希臘哲學者が智識索尋のため、若干期間東方旅行を企てたといふ傳説を以て、希臘哲學者がペルシヤに於て印度思想を得たといふ想像の傍證として居る、バルセレミー (*Barthélémy, Premier Mémoires de Sankhya pp. 512—525*) はピタゴラスの輪廻轉生説を論じ、それを以て埃及の思想に基いたものではなく、寧ろ印度より得た者であらうとして居るが、ガルベは又之を以て正當な見解であるとして居る、コレブルークは一步を進めてピタゴラスのみならず總じて希臘哲學思想と印度のそれとを比較し、後者を以て前者の *teacher* であると述べて居る、其他先きに擧げたるシュレイトデル及びセルマン (*Schermann, Materialien zus.*

Geschichteder Indischen Visionsliteratur, s. 26) 等ピタゴラスのその思想を以て印度より輸入せしものなることを推論する學者は實に尠くはないのである。

八

前既に述べし輪廻思想の發源地に關する埃及希臘兩國の關係論が區々なりしが如く、今又希臘印度間に於て同様の問題に到着することゝなつた。一體この兩者の間に於て果して何等か關係があつたのであらうか否か、そして若し關係ありたりとすればその何れが本であり末であるのか。

ローリソンが言へる如く埃及の思想が印度から來たといふことは考へられな
いことであると同時に、その逆も亦信ずべからざることであることはオッパートの
言ふ通りであらうと思ふ、若し然りとすれば印度と希臘との間の問題は第三者の容
啄を許さずして兩者の間に、(一)印度と希臘とは全く獨立にその思想を有して居たの
であるか、或は(二)印度の思想は希臘の影響を受けたのであるか、或は(三)その逆である
かといふ三問題が終局の論題となつて來る。

第一説は一見明瞭直截な議論の様で、最も無難な説であるが、併しこの説と雖ども

兩者の間にペルシャが介在し、或る意味に於ける交通が行はれて居たといふことは之を容認して居るのであつて、唯思想上の交通をしたといふ證據が無いといふのが其説の論據となつて居るのである、けれども苟も商業上といひ貿易上といひたとへ第三者を介してゝあつても、其間に交通ある以上思想の方面に於ても多少相傳へ交渉する所あるは考へられないことでも無いと思ふ、證據が無いからと謂て之を抹殺し去ることは思ふに餘りに大膽にして早計な議論ではあるまいか、尠くとも兩者交渉程度の強弱を今少しく深刻に洞察せねばならぬといふ憾がこの説には殘されて居ると思ふ。しからば若し兩者思想上相關係する所ありたりとすれば茲に第二説 (Burnet, Early Greek philosophy など此説を主張すと聞く) の如く希臘が本にして印度は末なりとなす説と、前節所述の如く印度主にして希臘従なりとなす説(第三説)とが現はるゝことは自然の經過である、然らば眞理はその何れに存するのであるか。

九

147
今兩者の思想を比較するに、若し兩者相似てしかも優劣ありといふ側から之を見れば第二説は容易に容認せらるべくはなくて、寧ろ第三説に與せざるを得ぬことは

敢て牽強な態度ではないと思ふ(後節参照)又時代に於ても印度の方は固より明確には知ることが出来ぬが、併し輪廻轉生説の現はれて居る優波尼沙土の時代が、紀元前五六百年頃に生存したと傳へらるゝピタゴラスより後であるとは信ぜられない、勿論優波尼沙土時代に於てその思想が尙周知の思想ではなくて、最も嶄新なるものであつたことはヤージュナヴルキヤが衆人の巷を避けて深く森林の中に秘密に之を説いたといふ事實に依りて想像せらるゝのではあるが、と謂ても併し之を以て希臘輪廻轉生説發生時代より繰り下ぐることは想像し得られない所である、そして間接的ではあるが兩者の間に交通ありたりとすれば、思想上幼稚でありしかも知識欲の強かつた希臘人が印度の思想をも多少輸入する所あつたと想像することは必ずしも無理ではなからうと思ふ、兩者の思想を比較し、又印度輪廻思想が吠陀時代以來その思想の萌芽を有し、次第順序を経て秩序整然として優波尼沙土のその思想に到着したといふ思想發展の徑路より見ても、希臘に於けるその説の發生事情と比較して、印度の方が従の位置に立つべきものであるとは信ぜられない。

兩者の思想上の問題は後に述べることとして、次に先づ少しく兩者の間に於ける交通事情に就て説明を試みて見よう。

さて希臘と印度との最古の代に於ける交通に關しては古來種々議論の存する所ではあるが併し考古學、比較神話學、比較言語學等の方面から觀察すれば兩者の間に於ける密接なる關係は否定することが出来ない、元來彼等兩民族は或る時期の間同一の地方に於て共住の時代を経たのである、マクスミューラー (Max Müller) が言た様に *Dyauspitar* = *Zeuspater* = *Jupiter* = *Tir* は最早や動かすべからざる事實となつて居る。

恐らくその原始共住時代に於てはその信仰もその文明も、その軌を一にしたものであらうが、東西分離の後に於て兩者思想發展の上に遲速の相異を來すに至つたのであらう。そしてこの兩者の交通を助けたものはベルシャヤ人であるといふことは總ての學說の一致する所であるが、そのベルシャヤ人 (イラン人種) といふのがその源既に東漸民族中の一部分であつて、印度アソリヤ人種とあらゆる點に於て密接不離の關係を有する事は殆ど既定の事實であるといふ點より察すれば、たとへ間接であるとはいへ希臘と印度との交通が殆んど希臘とベルシャヤ兩國間の交通と等しき程度に於て行はれたと推論しても大なる誤はなからうと思ふ。そして古代印度に於て希臘人を呼ぶに *Yavana* なる語を以てしたのであるが、この語に就て少しく述べべきことがある。抑も希臘哲學發生の地は小亞細亞の沿岸及び伊太利南部等の殖民地に

あつたのである、就中かのフェニキア人の海上に於ける勢力の衰ふるに乘じ、遠く地中海を往來し通商貿易の中心となつたイオニア種族の創意發明の才が希臘哲學の搖籃を擁護したものであることは事實として疑ふことが出来ない様である、そしてその發生の時代は凡そ紀元前第六世紀頃といふことに學説が一致して居る。當時に於て希臘と印度との交通は間接とはいひながら、可なりそのイオニア商人を通じて頻繁であつたのである。所謂 *yavana* とはそのイオニアの音譯であつて、恰もイオニア種族その他一般希臘人が印度人を *Indos* と呼んだのと相對して居るのである、思ふにこの當時に於ける印度の思想界は餘程進歩して居たもので、殆ど優波尼沙土時代の終局に垂んとして居た時代であつたと信ぜられる。そして *yavana* とはベルシヤ語の *yavna* と同一であるが、之はイオニアの原語 *Ion* そのまゝの音譯とするよりも、寧ろその昔 *Iafon* と謂て居た時代の音譯であると見る方が適切であるといふ説が若し幸にして誤なしとしそしてこの *digamau* は紀元前八百年頃には既に廢語となつて居たのであるとすれば (*Rawlinson*)、兩者の交通は既にこの時代以前から行はれて居たと想像し得らるのである。そして元來學問藝術に對し驚くべき才を有し知識欲の爲に汲々として居たものゝ多い希臘人の事であるから、その交通に於ても

單に商業上のみに止まらず、それに伴ふて自ら印度の思想にも觸れ多少の程度に於て之を輸入したことであらうと思はれる。若しこの想像にして幸に大過なしとすれば、上述の如く紀元前第六世紀頃より生起し始めたる希臘哲學の上に印度の影響があつたと見ても大なる不都合はないと思ふのである。又紀元前五百餘年キロス(Cyrus)は既に印度の西北地方を侵略し、又之より少しく後れてダリウス(Darius)は亦北方印度を征し、スキラックス(Skyllax)はその命に依りて紀元前五百〇九年印度に旅行を企て、その見聞を録したといふ信ずるに足る傳説もある。又古來西人がピタゴラスの發見に係るとなす幾何學の定理「直角三角形の直角に對する邊の上の正方形は他の二邊の上の正方形の和に等し」といふのは、ピタゴラスより數百年以前に於て印度人既に之を知て居たといふ事實がある。希臘と印度との最古の時代に於ける交通事情及びその思想上の關係も略ぼ察知せらるゝではないかと思ふ、この時代に於ける兩者の交渉を一概に *Physically* に不可能であるとして之を否定することは果して如何であらうと疑ふ。



(余は上にヤージュナヅルキヤが創唱した具體的な印度輪廻轉生思想には何等他よりの影響を受くるの必要を見ざる位その思想發展の史的要素が以前から存在して居たと言ふたが、今之を茲に歴史的に述べることは冗長に失するの嫌があるから、唯余がこの説に賛意を有する一人であることを告ぐるに止めて、その詳細はオツパートの著(五二六―五四頁)、及び木村學士著印度哲學宗教史などに譲り以下直にヤージュナヅルキヤの立場から希臘輪廻思想を窺ひ、思想上から兩者の關係を研究して見ようと思ふ。時代の範圍は亞歷山印度遠征以前頃までにして置く、固より印度にはそれ以前既に諸派の哲學勃興し、輪廻思想に關して述ぶべきもの大にこれあるも、今は只印度原始輪廻思想の代表としてヤージュナヅルキヤのみを採り、以て希臘數代のその思想を見ることとする。蓋し兩者原始時代に於ける思想比較が本稿の主要目的であるからである。)

さて希臘に於て始めて具體的に輪廻轉生の説を唱出したものはピタゴラス(オルヒウスとの關係に就ては前既に之を述べた)である事は動かすことが出来ない様である、併し彼れの抱持した輪廻思想の本旨が果して如何なるものであつたか、今日より之を推求する途は全くないのである、思ふに彼れ及び彼れの學派に於ては宗教的信念を以て其中心としたのであるから、その宗教的信念生活の條件とし制裁として善惡應報の輪廻説を主張したのではないかと想像される、若し然りとすれば之は即ち現世に於ける人間の行爲を牽制し、死後に於ける靈魂の運命に對する恐怖或は歡

喜の念を喚起し、以て倫理的に宗教的生活を送らしめんとするにあるのであるとすることが出来る。このピタゴラスの輪廻思想はその學派のものに依りて維持され次第に進歩した様である、彼等に依れば人間の靈魂が肉體に宿れる間は之を知覺の具として用ゆるのではあるが、若し一度靈魂にして肉體を去れば天上の世界に往き、肉體的繫縛を離脱した至幸の境に入ることが出来る、併しその條件として人は現世に於て必ずそれに對應すべき善業を積まねばならぬ、若し人にしてこの世に於て何等善業をなすなくんば、その程度の輕重に應じ再び世上の生活に縛せらるゝか、或はタルタロス (Tartarus) に墮在して罰を感ぜざるべからずとなして居る。併しこれ亦この學派の持論である天體循環説と關係がある様で、諸の天體は時來らばその原位置に還り、絶えず同一の變遷を繰返すべしといふ思想を靈魂の側に應用したとも見られるが、併しこの派哲學思想の根據である一を以て諸數諸物の根元とする數論とは別に關係ありとは思はれず、彼等がこの輪廻思想を有したのは、寧ろ之に依りて派祖と等しく彼等盟社に於ける宗教的生活遂行のための制規的教説として見る方が、適切な様である。

エムペドクレースに依れば人間の靈魂はその業の善惡に隨つて永劫轉生するも

のである、若し其罪業を棄つる事を得れば、その時人間は至幸の人となり、後神界に入る、動物の靈魂も元は人間の靈魂と同一であつたのであるが、唯轉生のためにかゝる状態に墮落沈淪せるのであると謂て居る、併しこのエムペドクレースがピタゴラス學派の影響を受けた事は明かな事で、彼れがその輪廻說中殺生肉食すべからずといへる所などより察すれば、彼れ亦その哲學思想に基きこれを主張したのではなく、ピタゴラス學派と同様に宗教的生活の一條件善業策勵の手段として之を説いたのではないかと思はれる。

若し然りとせばその哲學思想に基き、その必然の結果として唱出したヤージュナヴルキヤの輪廻說とその出發點に於て已に兩者大に趣を異にせるものであつて、彼れより此れが數百歩進んだ思想内容であつた事は、その出發點に於て最早之を察知することが出来る、即ちヤージュナヴルキヤの思想に依れば、宇宙本體アトマンは元來吾人の心内に存するものであつて、それが無明のために外的に表現せし時茲にそれは業となつて現はれるのである、即ち言ひ換へればアトマンは業に應じて實在するものであり、業以外更にアトマンの實在はないのである、固より業の形は變化する、併しその働自身は無限に永續して増減更に無いのである、故にその働自身の

側より見れば實に常住不滅の性質を有して居るものであるとしなければならぬ。茲にアトマン常住の説は必ず又業常住の説を誘出しなくてはならぬ。既に業を以て常住とすれば現世の業は現世に於て消滅するのではなく、將來必ず形を異にして現はれなければならぬ、而して善因には善果、惡因には惡果、因果連續絶ゆる所なしと見るのであつて、こゝにヤージュナグルキヤの輪廻轉生説は成立したのである。即ち上述希臘の輪廻思想が主として外部的、通俗道德的、目的論的なるに反し、ヤージュナグルキヤの思想は心理的、論理的、推論的結果生じたのであるから、兩者思想内容上の輕重測知するに難くはなからうと思ふ。

今假りに一步を譲りて、上述希臘輪廻思想中に善業累積の後靈魂肉體を去れば天上世界に往き、肉體的緊縛なき至幸の境に入るといひ、或は若し罪業を棄つるを得ればその時人は至幸の人となり後神界に入る、などある點を以て輪廻思想に伴ふ解脱の思想が表はされたものであるとして見よう、そしてその至幸の境といひ、至幸の人といひ、肉體的緊縛なき樂境といふものを、假りに彼等の解脱涅槃の境界であるとして見よう、しかも尙その時間的經過を要する解脱思想であることは之を否定することが出来ない、今之を我れ即ちこれアトマンなりと知るものはこれ全世界なり

諸天も之を妨ぐる事を得ず、何者彼れ即ちアトマンなればなりとの思想に基き、人は皆解脫の境に入るを要せず、彼れ既に解脫せるものであつて、眞智によりアトマンを知識し認識せる刹那同時同刻現身のまゝ、解脫涅槃の境界なりとなす、汝卽是のヤージュナヴルキヤの思想と比較すれば、兩者思想の深淺日を同じうして論ずることとは出来ないと思ふ。

併し眞正の幸福は眞智に依りて得らるゝものであり、理性の満足は常住である、人間の肉身は只僅かに靈魂を盛る器に過ぎず、眞實の幸福は肉身にあらず、牛馬の多きにあらず、金銀珠玉にあらず、只心の徳のみ眞實の満足を與ふるものであり、道徳は外形の行よりも寧ろ内心の状態にありとなしたデモクリトスの思想や、吾人の行爲は各自の悟了せる所に随つてなさざるべからず、各自の判斷力を用ゐずして唯因習に盲従するは未だ眞の徳行ではない、徳行の根據は明智にあり、吾人は先づ吾が無知を告白し、新智識生活に生きざるべからずとなし、一方神明の照覽、善惡に對する賞罰の存在を信じたソクラテースの思想などは、ピタゴラス學派やエムペドクレースの說などと比較せば、その道徳的意義に餘程心理的、知識的傾向を帯び、ヤージュナヴルキヤの人生觀——特に彼れが彼れの妻マイトレイに不死の法を説く經過の中に現

はれたる人生觀——に稍似通ふた所があるが、併し彼等のこの思想は輪廻思想に關してのものでないからこゝに之を比較論料として引用する事は事實出來ないのである、たとへ假りに今之をこゝに轉用してもその所謂眞智といひ明智といふものがヤージエナヴルキヤの所謂非此非彼 (neither) 的宇宙本體を味識するに足るが如き眞智であるとは、彼等の智識論乃至彼等の哲學思想が之を許さぬのである。

又ピタゴラス學派及びエムペドクレオスの輪廻說中に謂ふ所の善業善果惡業惡果といふのは、一見業説を説いたものと見ることが出来るが、併しその業なるものゝ本性や、その依りて生ずる原因などに關しては何等説く所がない、然るにヤージエナヴルキヤに依れば、業の本性は上述の如く常住なる宇宙本體に伴ふ必然的顯現でありとし、其原因を以て吾人の意力にありとなして居る、更にその意力の依て生ずる所は吾人の欲にあり人は欲より成るとまで窮盡して居る、即ち因果應報説は人間思想の存する所必然の結果として生ずるのであるといふ事を論理的に宣明して居るのであると見る事が出来るのである。

以上論ずる所のみに依りて之を見るに、希臘輪廻思想なるものは終始ヤージエナヴルキヤの思想の僅かに外形的一部分を存せるものであつて、之に依りても若し兩

者の間に關係交渉する所ありたりとすれば、印度が末で希臘が本であるとは考へ得られない所であり、寧ろ印度主にして希臘従なりと見る方が自然であると言はねばならぬと思ふ。而して降つてプラトト、當時に於ては既に印度に於ては諸派の哲學生起して居るのであつて、この當時以後の希臘哲學者の思想が益々印度思想と接近し來れる事實は果して何を語るものであらうか。

さてプラトトの輪廻轉生説は彼れの倫理説中に説かれてある、而してこの倫理説なるものは彼れの知識論の結果として成立せるイデア論及び彼れの學說全體の究竟の目的であつて、これが彼れの哲學の眞髓であるとも見られるのである、彼れに依ればイデアの知識は吾人に取りて全く新しいものを得るのではなく、吾人が本來有せるものを再び想起するに過ぎないのである、そして吾人の靈魂は生以前より存すると同時に死後亦滅することなく、現在の生活はこの靈魂が肉體に宿れる状態である、元來靈魂はイデアの世界に在つて親しくイデアを觀じて居るのであるが、一度それを肉體に宿すやイデアの世界を忘れ、影像の世界に流浪すとなすのである、けれども影像を縁として吾人は曾て觀ぜしイデアの世界を想起するのである、こゝに靈魂過去の存在はイデアの智識論に依りて立證せられて居るのである、そして現在の生活

は繫縛の生活であつて、イデアを觀じ之に依りて満足の境に達する事は出來ないのである。こゝにイデアを思慕しその繫縛を脱せんとするの念、これプラトールが靈魂未來の存在を説いた根據である。彼れ輪廻轉生と因果應報とを相結びて觀ずらく、若し靈魂にして前世惡業あらば現世に於ては墮落して肉身に宿る、吾人若し現世に於てイデアを思慕し善美の生活を送らば死後肉體の苦惱を脱し、高等なる存在に入る、若し之に反し惡業を積み陋劣なる生活をなさば未來に於て更に賤しき生活を感ずべしと。

このプラトールの輪廻轉生説は從來希臘のそれに關する思想を大成し組織し、彼れ自らの哲學思想の基礎より心理的、論理的に之を唱導したのであると見る事が出來、その出發點に於て既にヤージュナブルキヤと相類した所がある。今若し假りに此プラトールの思想をヤージュナブルキヤの立脚地より見るとすれば、かのイデアの思想に相當する者は先づアトマンの思想である、而て靈魂が肉體に蔽はれざる間は明(Vida)の世界であり、それが肉體に宿る場合は無明(Avidya)の状態である、又想起思慕の程度如何に應じてこゝに業の善惡輕重ありとすと見らるゝプラトールの思想は、ヤージュナブルキヤの欲により意力生じ、意力により業生ずとなす説と相似て居ると

考へられぬでもない。又プラトイが靈魂が肉體に宿れる間吾人は影像虛妄の世界に没在すとなす結果、この肉體及肉體的一切の羈絆を脱してイデアの世界に上らんとする要求から解脫の思想を述べたるが如きは、ヤージュナヴルキヤが靈魂が體を去る時智と業と其過去の識とは彼れに隨つて離れ去るべし、恰も尺蠖が葉の一端に達すれば更に他の葉端を捕へて之に移らん事を求むるが如く、靈魂も亦體を棄て無明を離るれば更に他を捕へて之に移ると言たのと、固より前者は輪廻思想より出でたる解脫思想そのものを説き、後者は輪廻思想を表はせるものなるも、兩者思想系統の相似たるは否むべからざる所であらうと思ふ。その他兩者相似の點は之に止まらず、殊にこの輪廻説のみに限らず、プラトイの思想全般をヤージュヴルキヤの立場より見れば、その相似の點は實に尠くはないと思ふが、今はその場合でないから特に輪廻思想に關し以上の如き相似點二三を代表的に擧ぐるに止めて置く。

さて兩者輪廻説に於ける相似點の大體は以上の如くであるが、併しプラトイが只管にイデアの世界を思慕するの結果生じたる解脫の思想は、厭離穢土の思想を伴ひ、肉體を脱するを以て死と稱し得べくば哲學は實に死の準備であるとなした厭世思想は、ヤージュナヴルキヤの與せざる所である、彼れに依れば、若し吾人にして最高の

目的、最高の成就、最高の世界、最高幸福の境に入らば愛欲もその心を動かす事なく、夢も亦見る事なし、憎なく怖なく、内なく外なく、悲哀苦惱亦無し、既にその欲する所を得るを以て之に愛著するの心なし、従つてこれ即ち自由の境である、愛欲を沈め愛欲の根を絶するものはその生命も彼れを去らず、何者彼れ即ちアトマンなればなりとなすのである。固より彼れ自らもアトマンのみを不死者であるとし、その他一切のものを以て不幸に満てるものと説き、厭世的口吻を漏らして居る所もあるが併し彼れの解脱思想の根本に想到せば、彼れが解脱の境を唯心の世界に求め、現象を離れては解脱の境の存するものにあらざる事を主張するものなることは前既に述べし所に依りて之を知る事が出来ようと思ふ。即ち「アトマン」に依れば、汝即是に體達すればその刹那その處直ちに不死の世界であるとすのであつて、彼れの所謂解脱は肉身の分散を意味するにあらずして、生死即涅槃の思想を主張したのである事は疑ふべくもない、固よりプラトンの倫理説中その美術的方面に於ては肉體を棄てずして、吾人現在の生活にイデアを實現せんと努むる思想傾向は現はれては居るが、併し「アトマン」の現世涅槃主義の如くしかく明確なものでは決してない。以上はイデアとアトマンとを假りに比較し得るものとしての議論である

が、若し公平にヤージュナヴルキヤの立場より批評すればイデアの思想はアトマ
ンの思想とよく似ては居るが併し尙それに比し未だ幼稚の感なき能はざる所であ
る事は言ふまでもない。

後希臘に於てアリストートルを經て、倫理時代、宗教時代の現はるゝに至りては益
々印度思想と接近せるの觀を呈して居るが、併し之は多く既に亞歷山遠征後に屬す
る時代に生じたものであつて、兩者間に於ける思想上の交渉も亦明かなるものがあ
るから茲には之を述べない。

十一

以上論ずる所に依りて之を見るに、亞歷山遠征以前に於て希臘と印度との間に交
通があつて、思想上殊に輪廻思想に就て若し相影響する所ありとすれば、否、あつたと
思ふが、その思想發展の順序及内容、そして相互間に於ける相似と深淺の度等より觀
察して、希臘末印度本と思はるゝ事は恐らく事實ではあるまいかと思ふ。固より希臘
にはその初め前既に述べた程度に於て埃及から多少影響は受けたであらう、けれど

も以上研究する所より察すれば、埃及よりも印度の方が時代は後であるとしてもその感化の力はより一層強大であつたとする方、思想上その間の説明が容易ではないかと思ふ、勿論この思想を以て各民族獨立に有し得るものであるといふ事は認むべき事であると思ふが、時代關係に於ても少しも差支ふる所がない。勿論ローレンソンが言ふ通りヘロドトスの記する中には何等印度の思想が取扱はれて居ない、又希臘の哲學者が印度婆羅門を訪問したといふ傳説はあるが之は紀元第二世紀頃に現はれた傳説であつて信ずるに足らず、その他兩者の關係に就て最占の時代に適用せらるゝが如き積極的資料はないのであるから、彼れの最古希臘印度思想沒交渉論は一應の理由はあるが、併し之はつまり皮相の觀に過ぎずして、事實の真相は今少しく内面的に洞察を加へなければ之を知ることが出來ないと思ふのが余の意見である。

主要なる參考書

- Budge, *The Gods of Egyptians.*
 Campbell, *Religion in Greek Literature.*
 Colebrooke, *Miscellaneous essays,*
 Eplhinstone, *History of India.*
 Enfield, *History of philosophy.*

Garbe, Philosophy of ancient India.

Gruppe, Griechische Mythologie und Religionsgeschichte.

Harrison, Prolegomena to the Study of Greek religion.

Oppert, The Original inhabitants of India.

Rawlinson, Intercourse between India and the Western World.

Rohde, Psyche, Seelenent und Unsterblichkeitsglaube der Griechen.

松本博士著 印度雜考

大西博士著 西洋哲學史

(尙 Burnet, Early Greek philosophy 及び Keith, Pythagoras and Transmigration (J. R. A. S. 1909) 等、特に希臘文明に關する坂口博士の新著は之を閱讀するの必要を認めしも時年末に迫りその餘裕なく、全篇の杜撰深く讀者に對し謝する所也、大正七年一月五日)